巻頭言

東方へのまなざし

桑原直己

私が研究対象としてきたトマス・アクィナスにとって、アウグスティヌスは不動の地位を占める「師」であった。まず、トマスが属していた説教者兄弟会（ドミニコ会）は、アウグスティヌスの修道規則を採用した修道会であった。そして、何よりもトマスが身を置いていた西方カトリック教会全体の神学的伝統を方向づけたのはアウグスティヌスであった。トマスがギリシア教父の研究に着手したのは、比較的後期（一回目のパリ大学教授の任期を終えた後のイタリア時代以降）になってからのことだと言われている。周知のとおりトマスは『神学大全』を死の直前まで書き続けており、その第三部はトマス晩年の作である。そこでは、たとえばキリスト論に関する古代公会議の定式などが扱われているが、それはそうしたギリシア教父研究の成果を反映したものである。

思えば、私たち日本の研究者たちもトマスと同じような立ち位置にいるような気がする。教父研究会

の前身は「アウグスティヌス研究会」であったと聞く。このこと自体、日本の教父研究がアウグスティヌス研究を中心に展開してきたことを物語っている。現在、中世哲学会などでもアウグスティヌス研究者の層は厚く、議論は洗練されている。先人たちからの蓄積もあってか、素人目にも日本のアウグスティヌス研究は国際的に見て遜色のない水準に達しているように思われる。私は教父学から見ると隣接領域の研究者ということになるが、縁あって何回か「環太平洋西岸教父学会」（現「アジア環太平洋初期キリスト教学会」）に参加させていただく機会があり、そのときこのことを実感した。と同時に、アウグスティヌス研究だけが教父研究ではない、という当たり前の事実にもその時気付かされた。日本人の発表者はほとんどがアウグスティヌスの専門家であったが、オーストラリアからの研究者の専門はギリシア教父はじめ多彩をきわめていたからである。

日本ではキリスト者は少数派であり人口の約一％、一〇〇万人に過ぎない。その内訳はほとんどがローマ・カトリックかプロテスタント、つまり「西方キリスト教」に属している。東方正教会の信徒数は約二万五千人に過ぎないと聞く。つまり、日本で「キリスト教」と言えばほぼ西方キリスト教のことを意味しているのである。これに対して、オーストラリアではオスマン帝国崩壊後の移民などにより東方キリスト教を信じる人々を多数擁していると聞いている。無論、教父の研究者は必ずしも自身のキリスト教信仰を前提している人ばかりではない。しかし、「日本で教父研究と言えばアウグスティヌス研究」という状況は、日本における「キリスト教」をめぐるそうした事情を反映しているように思われる。そ

れゆえ、日本の研究者たちは西方キリスト教の伝統の枠内にあって、アウグスティヌスの決定的な影響下にある、と言う意味でトマス・アクィナスと同じ状況に置かれているのではないか、と考えられるのである。

たしかにアウグスティヌスは生涯をかけて研究するに値する偉大な教父である。しかし、私たちはキリスト教の全体像にアプローチしようと思うならば、アウグスティヌスを超えて時代を遡り、また特に「東方」へと視野を広げて学ぶ必要がある。たとえば、ニカイアからカルケドンに至るまでの古代公会議において確定された教義（ドグマ）は、東方教会にも、プロテスタント・カトリックを問わず西方教会にも、その大枠においては現在に至るまで共有されている。これは主としてギリシア教父たちによる苦闘の結実であった。さらには、そうした盛期ギリシア教父に先行する存在として、私たちは「使徒教父」をはじめとする初期教父たちの足跡にまで目を配らなければならない。

ところで、「日本で教父研究と言えばアウグスティヌス研究」という言い方には若干の誇張があることに注意を喚起しておきたい。『パトリスティカ』誌のバックナンバーを改めて手にとって見直してみると、そこに掲載されている論考は必ずしもアウグスティヌス一辺倒ではなく、初期教父やギリシア教父などについての研究をも広くカバーしていることに気付く。つまり、けっして人数は多くはないにしても、日本でも広い範囲にわたっての教父学に先鞭をつけてくれた先輩たちの足跡を見ることができるのである。

個人的な話になるが、今後私はトマスの『神学大全』第三部と取り組んでゆきたいと考えている。本来、私には教父学について大きなことを語る資格はなく、トマスの師である限りでのアウグスティヌスについ

ても、まだまだ多くのことを学ばなければならぬ身である。しかしながら、それと同時に、私は後期のトマスと手を携えてギリシア教父の世界への窓を開いてゆきたいと思っている。